

川祭りが映す時代の変化

伊藤 彩子

中部地方の川祭りと言えば、津島の天王祭が有名である。昔はこれを模した巻藁船（まきわらぶね）の出る川祭りが、中部地方の様々な川を舞台に行われていたが、時代の変遷とともに次第に廃止され、少なくなった。しかし、近年は、文化の継承や交流の活性化のため、再び川祭りを復活させたところもある。川祭りがはじまり、失われ、再び復活するという一連の流れは、人々の暮らしと川の関係の変化を映し出している。

時代の変化とともに姿を消す

中部地方でもかつて多くの川祭りが行われていたと考えられるが、時代が大きく変化した明治時代から高度経済成長期までに中止されたものが多いようである。

現在は桜の名所として人気がある清洲の五条川は、江戸時代には大掛りな花火で知られ、『尾張名所図会』にも記事がある。五条川に、津島のような提灯のついた巻藁舟を浮かべ、船がゆっくりと川を下る間に様々な花火が打ち上げられたというが、祭りは明治時代になって衰え、花火も昭和の初めに廃止されている。また、名古屋市中区栄一丁目の堀川の東岸に位置する州崎神社では、名古屋の繁栄を願う徳川宗春の意思によって享保十七年（一七三三）、船祭りが始められ、名古屋城から神社まで堀川を神輿が下ったという。宗春が退いた後は、神社から熱田の浜まで巻藁舟が流されるようになったが、明治二十二年（一八八九）に廃止された。熱田の南新宮社では、江戸中期には巨大な大山がでる大山祭りが行われていたが、明治になって電線が障害となり、大山を動かすことができなくなったため、堀川に巻藁舟を浮かべる祭りに変更した。しかし、これも昭和四十八年（一九七三）



栄1丁目堀川東にある州崎神社。かつては堀川に面していたが、今は敷地も狭くなり、車道や他敷地によって堀川と隔てられている。

までで中止されている。名古屋市中川区の下之一色では、氏神の祭礼として新川に巻藁舟を浮かべて祭りを行っていたが、昭和三十七年（一九六二）を最後に船祭りは廃止され、現在は神社の参道に巻藁提灯を飾った屋形を置いて祭っている。

ここに挙げたものはどれも本来は津島と同じく、疫病除けとして信仰を集めている牛頭天王（ごずてんのう）を祀る天王祭であり、当初は神事として行われていたものに、次第に娯楽的な要素が加わって船祭りなどが行われるようになったと思われる。祭りがはじめられた当時、川は、人々の生活に非常に身近なものであった。物資の輸送路や生業の場として重要な役割

を果たしており、祭りの時には娯楽やにぎわい、交流の中心となった。また、時には水害をもたらす恐ろしい存在でもあった。

しかし、明治以降、時代の変化に伴って祭りの運営が困難になり、すべて廃止されている。船や水夫の手配ができなくなったこと、祭りを支えるコミニティがなくなったことなどが直接的な原因となっている。この背景には、陸上交通の発達や産業の変化によって川が従来果たしていた役割を失い、川で行われていた産業も少なくなるとともに、治水技術の進展によって、かつてのような脅威をもたらす存在でもなくなり、川と人々の関係が疎遠になったということがある。その結果、人々は川に無関心となり、都市部の堀川などでは水質汚濁が進んだ。

平成に入り復活の動き

しかし、平成に入ってから、新しい動きがでてきている。一度廃止された川祭りを復活するところが増えてきたのである。

【堀川まつり】

熱田では昭和四十八年（一九七三）以降、船祭りが廃止され、かわりに提灯のついた屋形を熱田神宮内に飾る「献灯巻藁」を行うようになっていた。熱田のミニコミ誌をつくっていた市民グループが堀川を調査するうちに、かつてはにぎわいの中心的な場所であったことを知り、昔の熱田祭りを復活させようと、平成二年（一九九〇）、かつての5分の1のサイズの巻藁船をつく

って堀川に浮かべ、「堀川まつり」を始めた。熱田神宮や州崎神社などで祭りの歴史などを勉強し、平成九年（一九九七）からは、かつてやはり巻藁船の天王祭を行っていた州崎神社まで船が遡るようになった。堀川まつり実行委員会では、堀川流域全体に人のつながりを広げようと考えており、中流や上流の人達と交流している。また、平成二十二年（二〇一〇）の名古屋城築城

四〇〇年祭には昔のような大巻藁船を名古屋城の堀に浮かべる構想を持っているそうである。

【かわしま川祭り】

旧川島町は平成十六年（二〇〇四）に各務原市と合併し、現在は各務原市川島となっている。木曾川の川中島で、町全体が川に囲まれているのが特徴である。こうした地形により、昔から洪水に悩まされ、水神のたたりを治めるために木曾川の南派川に雌雄二艘の巻藁船を浮かべ、川祭りを行うようになったといわれている。祭り当日は、周辺の市町からも観客が訪れ大いににぎわったが、河川改修によって川の水量が減ったこと、祭りを支える人材の不足などから、昭和三十八年（一九六三）を最後に途絶えた。

しかし、地元から復活させたいという気運が高まったことを受け、川島町（当時）が県の補助金を活用して巻藁船一艘を修復し、平成七年（一九九五）、浅くなった川底を掘って浮かべ復活させた。平成十一年（一九九九）、町内に環境共生型テーマパーク「河川環境楽園」がオープンすると、園内の人工河川、木曾川水園に会場を移し、巻藁船も昔ながらの二艘として祭りを行っている。

これらの地域で川祭りが復活している背景には、人々が川祭り、そして川に新しい役割を期待しているということがあるだろう。川祭りが盛んに行われていた頃は、人々は川を中心としたつながりや地域の一体感を持っており、祭りも、それぞれの町が競って盛大に行っていたであろう。しかし、時代が変化し、川を舞台に育まれた連帯感や交流は次第に失われ、住民の

地域に対する思いも薄くなった。しかし、そのような生活のあり方に対する物足りなさや不安感から、かつて、生活の中心であった川を、祭りの場として復活させることで、そのまちが歩んできた歴史を未来に伝え、住民同士が連帯感を育むきっかけをつくりたいという気持ちがあると思われ、同時に、経済成長とともに建物が次第に建て込んでゆとりがなくなってきたまちの中に、再びみんなの憩いの場、遊びの場を取り戻したいという思いがこめられているのではないだろうか。

川祭りを復活させるためには、舞台となる河川の浄化や運営資金、人材の確保など様々な課題もあるが、堀川、川島では市民、行政が様々な努力、工夫をしてそれらの解決に取り組みながら、祭りを継続している。一度は社会から背を向けられた川であるが、暮らしの中にゆとりを求める傾向や、文化を見直そうという気運が高まってきた現代において、新しい役割を期待されているのである。



平成7年に復活した「かわしま川祭り」。現在は、環境共生型テーマパーク「河川環境楽園」に会場を移して行っている。

